

幼少期のストレス経験と健康格差

赤崎 美冬

2018 年度 FASID 奨学金プログラム採用 (6 期生)

修学機関: University College London,

Department of Behavioural Science and Health & Department of Social Science

研究課題: Does the cortisol and combinations of stress-related biomarkers explain pathways between childhood adversities and the incident cardiovascular disease?

略歴 (あかさき みふゆ)

札幌医科大学を卒業後、東京女子医科大学付属病院心臓病センターにて看護師として従事。東日本大震災では世界の医療団こころのケアチームの一員として現地で活動。その後、国際協力機構 (JICA) 青年海外協力隊看護隊員として南米エクアドルの先住民族コミュニティにて公衆衛生活動を行う。2016 年に University College London (UCL) の社会疫学修士号を取得。WHO 西太平洋地域事務所 (WPRO) フィジーにて研修を行った後、日本の高齢者研究チームに所属、Healthy Ageing に関する WHO 神戸との共同研究プロジェクトを担当する。2018 年 7 月より University College London の研究研修生として再渡英、同年 12 月より同大学の博士課程に在籍。

国際開発分野への出会いから博士課程開始まで

保健分野における世界的な課題である健康格差に関心をもつようになったのは、国際開発機構 (Japan International Cooperation Agency: JICA) 青年海外協力隊員として南米エクアドルに派遣されたことがきっかけだった。エクアドルの保健省は無料のヘルスサービスを提供しているが、サービス無料化だけでは解決し得ない様々な社会的要因が健康格差をうみだしていることを目の当たりにした。それらの要因をより

系統的に捉えるため、先住民族におけるヘルスサービスへのアクセス阻害要因に関する調査を計画した。データ収集、分析を行い保健省へ報告した。健康格差についてさらに理解を深めたいという思い、そして調査実施時に痛感した研究手法を基礎から学ぶ必要性から、大学院修士課程に進学することを決意。大学院は、エクアドルで調査を実施している際に参考としていた文献の著者が在籍する University College London (UCL) を選択した。修士号取得後、世界保健機関 (World Health Organization: WHO) 西太平洋地域事務所での研修、日本



UCL

の高齢者研究チームで研究アシスタントおよび研究員を経て、2018年7月からUCLに戻り、現在博士課程1年目である。

世界保健における循環器疾患

WHOの報告によると、心疾患および脳血管疾患に代表される循環器疾患は、世界における総死亡数1790万人（2016年）の約31%を占めており、そのうち75%以上が低・中所得国で起きている。また、2015年早期死亡（70歳未満での死亡）1700万人中、82%が低・中所得国で発生、37%は循環器疾患による。死亡だけでなく慢性疾患としての循環器疾患は、“うつ”のような精神疾患との合併症（Comorbidity）もまた公衆衛生上の課題となっている。これらは失職や医療費負担からの貧困（個人、世帯レベル）、さらには国レベルの経済負担につながり、とりわけ、低・中所得国でその影響は大きい。予防策として喫煙やアルコール、運動、食事といった生活習慣改善の効果が立証されてきた一方、これらの行動の根底にある原因については、さらなる研究が求められている。

幼少期のストレス

ひとつとして挙げられるのが、社会心理的ストレスである。さらに生活習慣は思春期に形成され始めることを考慮すると、幼少期に経験するストレスがライフコースをわたって健康に与える影響は大きい。また、貧困層の子どもは、富裕層の子どもに比べてストレスフルな経験（例えば、身体的・心理的虐待）をしやすい。これらの経験をした子どもは成長そのものに影響を与えるだけでなく、成人期以降に心疾患や精神疾患を発症しやすいことがこれまでの研究で報告されている。これらのことを総合的にとらえると、幼少期のストレス経験は健康格差ともいえる。博士課程では、幼少期のストレスと循環器疾患の関連について、因果関係、保護要因も含め研究をしている。



UCL が着目する世界保健の優先課題

低・中所得国への応用に向けて

低・中所得国、特に都心部における疾病構造は、急速に高所得国の構造に近づいている。そのため、高所得国における知見の応用を検討する利点は非常に大きい。また、研究の実現可能性だけでなく、結果の妥当性、また一般化可能性を考慮すると、データの量・質ともに豊富な高所得国のデータを活用し、理論を形成することの意義は大きい。一方で、低・中所得国と高所得国では社会的環境、例えば保健システム、に違いがあることは事実である。これらのことを多角的に勘案し、高所得国で得られた知見をどのように低・中所得国に応用していくかも含め、研究・実践、双方の視点から博士課程で理解を深めているところである。具体的には、在籍大学やロンドン大学衛生・熱帯医学大学院等が開催

する研究手法のコースワーク受講、世界的課題になりつつある Comorbidity についての講義やワークショップへの参加、また低・中所得国のプロジェクトに関わる研究者との交流活動、等に積極的に取り組んでいる。並行して、研究課題のデータ分析も進めており、今後は論文投稿等アウトプットにも力をいれていく予定である。FASID 奨学生として、健康格差是正に貢献することを目指し、今後も研究に励んでいく。